The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子育てに関する夫婦の意識構造の計量的研究
Author(s)	鈴木, 富美子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44827
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏　　名	鈴　木　富美子（すずき　ふみこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学．位　記　番　号	第　18083　号
学位授与年月日	平成15年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学　位　論　文　名	**子育てに関する夫婦の意識構造の計量的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　直井　優 （副査） 教　授　伊藤　公雄　　助教授　川端　亮

論文内容の要旨

本研究は、「子育て」を「夫婦」という枠組みから捉え直すための計量的試みである。子育てをめぐる諸状況を夫婦ペアデータから分析することにより、「夫婦でともにかかわり、ともに育てていく」子育て状況をつくりあげていくための課題を明らかにすることを目的としている。

調査は2002年2月から3月にかけて東京都内と神奈川県内の幼稚園4園と保育園8園に通う子どもの親を対象に実施した。調査票は992世帯に配布し、312世帯から回収した（回収率31.5%）。本論文では、幼稚園児と保育園児の年齢をそろえるべく、主に「子ども3歳以上の夫婦ペア票」245組のデータを分析に用いた。

本研究は二部から構成される。「第Ⅰ部　ペアデータからみた『夫婦と子育て』」では、夫の子育てへのかかわり方をめぐる夫婦間の評価認識のズレに焦点を当てた。第1章において、調査概要と対象者の属性について紹介したあと、第2章～第4章では子育てをめぐる夫婦の評価認識のズレについて、「時間」と「分担度」の2つの側面から検討した。

第2章では「時間」に着目し、夫が子育てに費やす時間量に対する夫本人と妻の認識のズレを平日・休日別、子育て内容別にみた。その結果、子育てをみる際、時間軸－平日か休日か－でみる妻と、子育て内容による軸－身の回りの世話か本読み・遊びか－でみる夫という違いが浮き彫りになった。

第3章と第4章では「分担度」に着目した。就学前の子どもをもつ親にとり、基本的かつ生活全般にわたる15項目の子育て項目を夫がどの程度分担しているのかについて、第3章では夫回答から、第4章では妻回答から分析した。また第4章では、夫回答と妻回答の違いについても検討した。分析は、項目別および「身体的子育て」「教育的子育て」「付添的子育て」という3つの合成尺度を用いて行った。その結果、夫のほうが自分がかかわる子育て内容を気にする傾向があった。

さらに、「時間」および「分担度」のいずれについても、夫側に自己過大評価あるいは妻側に夫過小評価する傾向がみられた。

続く「第Ⅱ部　子育てに関する夫婦の意識構造」では、前章までの分析結果を踏まえて夫婦類型を作成し、子育てに関する夫婦の意識構造について分析した。

第5章では、子育てに対する夫の過大評価傾向と子育て内容の捉え方の違いを考慮し、「一致夫婦・協力型」「妻過大評価夫婦」「夫過大評価・協力型」「夫過大評価・しつけ型」「妻任せ型」の5つの夫婦類型を作成するとともに、各夫婦類型の特徴を夫の子育て時間や社会的属性から探った。「時間」については、休日は子育てをしていると

いう「事実」が、平日の子育てに対する絶対的評価（子育て時間）だけでなく、子育てへのかかわりに対する相対的評価（子育て分担度）においても夫の自己過大評価傾向を生み出すのではないかと推察された。社会的属性については、「一致夫婦・協力型」や「妻任せ型」といったズレの少ない夫婦類型の場合には明確な属性的特徴がみられたが、「妻過大評価型」「夫過大評価・協力型」「夫過大評価・しつけ型」といったズレの大きな夫婦では属性的特徴を捉えにくかった。とりわけ「夫過大評価・協力型」については、夫婦の年齢差が小さいという点以外、とりたてて目立つ特徴はみられなかった。

第６章では、４つの夫婦意識（子育ての公平感や子育てに関するコミュニケーションギャップの有無など）における夫婦間のズレについて、相関分析、クロス表分析、一致係数から検討した。その結果、子育て分担をめぐる評価認識が夫婦でズレている場合、その他の子育てに関する意識にもズレが生じやすいことが判明した。

第７章では、子育てに関する社会的態度、具体的には性別役割分業意識、愛情規範、家庭における平等観といったジェンダー意識、子どもへのコミットメント感、子育て不安、そして結婚満足度を取り上げ、これら意識項目に対する夫婦類型の効果をみた。その結果、特に夫の意識に対して夫婦類型の効果が確認された。そこで夫婦の意識構造のありようを夫婦類型ごとに探ったところ、「一致夫婦・協力型」の夫・妻の意識構造がその他の夫婦類型の夫・妻とは異なる様相をみせた。「一致夫婦・協力型」の場合、夫・妻の双方ともに、家庭における平等観に肯定的であるほど性別役割分業意識にも愛情規範にも否定的になるという「ジェンダー意識の一貫性」がみられたのに対し、「夫過大評価・しつけ型」を除く３類型では夫婦ともに一貫性はみられず、いわば「ジェンダーの非一貫性」というべき意識状況にあった。

また、夫に着目すると、家庭における平等観と権威主義的態度の関連における夫婦類型による差、特に「一致夫婦・協力型」と「妻任せ型」の違いが際立っていた。「一致夫婦・協力型」の夫の場合、家庭における平等観と権威主義的態度が負の相関関係を示したのに対し、「妻任せ型」では正の相関関係－いわば「教条主義的平等観」とも呼びうる意識－がみられた。さらに、家庭における平等観が高いということが、「子育て不安」や「結婚生活満足度」に対してポジティブに作用しない可能性が、夫過大評価型の妻、そして「妻任せ型」型の場合には夫婦ともにみられた。自他ともに子育てのかかわりが「協力」以上であると認める夫と妻の意識構造こそ、現時点において「夫婦でともにかかわり、ともに育てる」子育てに最も近い意識構造であるといえよう。

第８章では、コーンの親の子育て行動の研究に用いられた項目をもとに、15 項目の子育て価値について検討した。ここではサンプル数の都合上、夫婦類型による分析はできなかったが、その準備段階として夫婦間の意識のズレを相関分析によって確認した。その結果、女の子よりも男の子に対して、どのように育ってほしいかという期待が夫婦でズレやすいことが判明した。

最後に終章では、各章での議論を総括し、「夫婦でともにかかわり、ともに育てる」ための課題について述べるとともに、子育て研究に「夫婦のズレ」という概念を持ち込んだ本研究の意義および今後の研究課題について論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代日本における就学前の幼児の子育てを、夫婦という視点から、調査を行い、ペアデータを収集し計量的に分析したものである。家族社会学においてペアデータを収集する必要性は、従来より指摘されていたが、なかなか実現されなかったものである。

本論文は、分析に際し、夫・妻のそれぞれにとり、子育てをめぐる世界がどのように捉えられているのかという観点からアプローチしている。その結果、お互いの見え方の違いを浮き彫りにすると共に、それを用いて、５つの夫婦類型を作成し、夫婦の意識構造を計量的に分析することに成功している。いくつかの新しい発見がなされているが、そのなかでも第１に、育児に関する夫婦間の評価認識にズレが大きいこと、第２に、子育ての時間や分担度に関して、夫の過大な自己評価がみられることを見いだしている。ペアデータの収集と計量的分析として、優秀な論文と評価できる。

以上により本論文は、博士（人間科学）の学位に充分値すると判定した。